

当センターは昨年度より、佐久大学の保健師養成コースの実習を受け持っている。その新たなご縁により佐久大学の紀要と接し、栗栖瑛子氏の秀逸な論説を拝読することができた。

そこには、明治8年に森有礼（初代文部大臣）からディックス DL（精神看護学の創始者）へ書かれた「ついに京都に一つの精神科病院が設立でき、さらに東京にも設立中（後に都立松沢病院）である」という趣旨の手紙が紹介されている。この明治8年は、京都府が南禅寺に癲狂院（我が国、初の公立精神科病院）を創設した年である。栗栖氏に拠れば、この森とディックスとの出会いが、近代精神科医療のモラルトリートメント（人道的処遇）を我が国にもたらしたのではないかと考察している。

ところで、小諸藩士・神戸文哉は、日本で初めて、近代精神医学書を翻訳したことで知られている。文哉は12歳のとき江戸に遊学、明治2年に大阪医学校、次いで大学東校に学ぶ。明治8年、前述の京都府癲狂院の医員として勤める。明治9年12月、文哉は英国のモーズレイの著書を翻訳し、「精神病約説」を刊行したが、日本における最初の精神医学書として高く評価されている。明治14年、大阪医学校の校長代理に任ぜられ、明治22年、大阪市内で開業する。明治37年、脳溢血にて逝去した。

この京都癲狂院の管理は栗田口の青蓮院にあった京都府療病院（後に京都府立医大）が当たり、半井澄（文哉は半井氏の養女きぬと結婚）が院長に任ぜられた。隣の禅林寺（永観堂）の東山天華らが、寄付を募り、癲狂院の創立に尽力している。京都府医大の福居顯二氏によれば、京都癲狂院の特徴として、(1) 明治8年7月25日に南禅寺方丈で行われた開院式で、外国人医師ヨンケルが祝辞の中で「病者ヲシテ庭園ニ逍遥シ花世遊観ニ情意ヲ慰メシム」と述べていること、(2) 「癲狂院諸規則」15条の「患者ノ症緩ヤカナル者ハ養生ノ為ニ是迄手馴レタル職業ヲ為サシメルコトアルベシ」にあるように、患者さんに今日の作業療法に似たものを取り入れていたこと、(3) 文哉が主幹となり明治12年に発刊された「療病院雑誌」に、癲狂院における7年間の入退院記録（診断、予後、転帰や症例など）が詳細に記載されていることが挙げられる。いずれからも精神障害を持つ患者さんに対して、英国流の人道的な処遇がなされていたことがわかる。しかしながら、良質の医療は経済的に徐々に破綻を来とし、わずか7年間のみ存続し、明治15年10月京都癲狂院は廃院となる。

今回、栗栖氏の論文から端を発し、佐久や小諸の地から、わが国の近代精神医学導入の萌芽を垣間見ることができたことを感謝したい。このように、公表された文献は貴重であり、信州公衆衛生雑誌にも信州発の優れた論文が数多く掲載されており、将来の公衆衛生学の発展に寄与できると確信している。

なお、モーズレイらは英国に同名の病院を設立し、今日も国際的な社会精神医学研究のメッカとなっている。現在、モーズレイ原著神戸文哉訳「精神病約説」は、創造出版から刊行された精神医学古典叢書第4巻に復刻されている。

文哉には3人のご息女がおられ、長女いまは久保家に嫁ぎ、その次男文彦氏が神戸家を継ぎ、その長男明氏は現在、東京に在住。本稿の執筆にあたり、資料提供された明氏の長女的美帆子氏に深謝する。